

15世紀英語の綴り字のバリエーションとその収束 ——Pepys 2125写本の事例から綴り字研究の課題を考える

家入葉子

1. 序

古英語（～1100頃）以来、英語の綴り字は、その大枠において発音を映し出すものであった。そうであるならば、綴り字は英語の音韻変化と連動しながら変化すると考えるのが自然であろう。しかし、その歴史を見ると、たしかに音韻変化との連動はあるものの、言語の外側にある要因、たとえば政治や社会の変化といった外面史上の変化に由来する慣習の変化も関与してきたことがわかる。

たとえば、古英語の<hus>「家」が中英語で<hous>のように綴られることが多いのは、発音の変化というよりも綴り字の慣習の変化である。中英語におけるフランス語の影響は、語彙はもちろん、言語のその他の面にも及び、綴り字も例外ではなかった。/u:/に<ou>の綴り字を充てるのは、その影響の一つである。また新しいところでは、アメリカ英語とイギリス英語の綴り字の違いもわかりである。確かに両者の間には発音上の違いも少なくないが、綴り字の相違は、これを反映したものというよりは異なる慣習が採用されたことによると考えた方がよい。辞書や文法書で知られるNoah Webster（1758-1843）がアメリカで綴り字改革を行った結果によるものだと、英語史では説明される。

このため英語史で綴り字を扱う際には、綴り字の変化そのものに加え、これに影響を与えた外面史にも焦点を当てる。一方、綴り字の変化が音韻変化と連動したものであれ、外面史に起因するものであれ、新たな綴り字は言語使用者の間で広く浸透することで定着する。この過程を扱う研究は必ずしも多いとは言えない^[1]。以下では、綴り字のバリエーションが急速に収束した中英語（1100～1500頃）の終盤、特に15世紀を分析の対象とし、綴り字の変化の事例

とその浸透の過程を考察する。

2. 中英語期の綴り字とそのバリエーション

中英語期は、英語史においては英語の綴り字の揺れ幅が最大化した時代である。古英語に比べて中英語文献の数が大幅に増加したことで綴り字の実態が見えやすくなったという点を考慮しても、やはり中英語期の綴り字のバリエーションは特異的に多いと言える。中英語初期のAB Languageのように、小さな標準化を追求する動きはあった^[2]。しかし、中英語全体を眺めてみると、ほとんど無制限と言ってよいほど、自由奔放に綴り字は多様化した。

この様子は、*A Linguistic Atlas of Late Mediaeval English* (LALME) (1986) を見ても明らかである。LALMEは、中英語の方言を特定する最も確実な手がかりは綴り字（あるいは関連する表記システム）であるとし、14世紀後半から15世紀前半の文献を対象に、綴り字の異形を徹底的に拾い上げることを試みた。LALMEが示すデータからも、中英語後期の綴り字の揺れ幅の大きさがよくわかる。たとえばLaing (1994, p. 123) は、LALMEのデータをもとに、ITの綴り字の異形が45、SHEの綴り字の異形が64、THROUGHの綴り字の異形が500以上もあったことを指摘する。中英語の綴り字はバリエーションとともに存在し、同じ著者が書いた作品、同じ写字生（写本を転写する人を写字生と呼び、英語ではscribeという）が写した作品中でも綴り字の揺れは普通に観察された。

ところが、中英語の綴り字はここから一転して、急速に収束に向かうことになる。英語史では15世紀後半を英語の標準化の時代と捉えるが、ここでの標準化は基本的には書きことば、特に綴り字の標準化である。Smith (2006, p. 133) が、「15世紀は綴り字の標準化の時代だ」(‘It is usual to describe the fifteenth century as the period of spelling standardisation’) と述べる通りである。その規模は、AB Languageのような地域的な標準化とは比べ物にならないほど大きい。綴り字の揺れそのものは、標準化の流れを受けてもなお継続し、本格的に落ち着いてくるのは1650年頃だと言われている (cf. Nevalainen 2012, p. 151)。

しかし、少なくとも同一単語を同一綴り字で表記する方向への流れがこの時期に急速に加速したことは確かである。標準化を特定の形式の選択からその浸透への流れであるとするならば、小さな標準化は英語史の至るところで起こる^[3]。これに対して、この時期の綴り字の標準化は、最大の揺れ幅からの急速な、しかも地域を超えた大規模な収束であったという意味で特筆に値する。このため、英語史で特に断りなく「英語の標準化」という用語を使う場合には、一般にこの時代の標準化を指す。

標準化に影響を与えた外的要因は複合的であるが、とりわけ重要なのが William Caxton による印刷技術の導入（1476）である。これにより文字を書き記す媒体が写本から印刷本に移行し、文献がこれまでにない規模で、地域の枠組みを超えて拡散することになる。また、大法官庁（Chancery）の文書における綴り字が一定のモデルの役割を果たしたことも、英語の標準化を議論する際に強調される（cf. Smith 2006, p. 133; Conde-Silvestre & Hernández-Campoy 2004）。ただし、Caxton の印刷物にも Chancery の文書の綴り字にも多様なバリエーションが存在していただけでなく、その綴り字の中には標準的な綴り字として定着しなかったものも少なくない（cf. Fisher 1977, p. 884; Horobin 2001; Nevalainen 2012）。また Chancery の綴り字は、Samuels（1963）が英語の綴り字の標準化に寄与したと考える4タイプの言語のうちの Type IV として広く知られている。しかし、その根拠になっているのはわずか8語であるなど、Chancery の綴り字の影響についてはさらなる検討が必要であるという議論も少なくない（cf. Horobin 2015）。いずれにしても、この時代の綴り字のバリエーションの収束が一般に考えられているほど単純でなかったことは確かである。

そこで小論では、中英語の終盤に綴り字のバリエーションが収束していく過程をさらに掘り下げてみたい。共存する多様な綴り字の中から、特定の綴り字が採択され、その使用が浸透、定着していく際にどのような傾向が観察できるかに焦点を当てる。具体的には、15世紀前半に転写された Pepys 2125 写本（ケンブリッジ大学）の第1テキスト、*The Chastising of God's Children* の WILL の綴り字についての小規模な事例研究を行い、同写本についての筆者自身の先行研究と比較対照しながら考察を行う。Caxton の印刷技術の導入は15世紀の後半、Samuels（1963）が定義する Chancery の英語は1430年以降であるが、中英

語後期はすでに地域の枠組みを超えた綴り字の慣習が広がりを見せてきた時期でもある (Samuels 1981; Taguchi & Iyeiri 2019: xlv-liv)^[4]。綴り字の標準化に至る道筋が徐々に拡大する傾向を見ることができるという意味で、15世紀前半は、注目されやすい15世紀後半と同様に重要な時代だと言うことができよう。なお先行研究では、綴り字の標準化のモデルとなったタイプに焦点を当てることが多いのに対して、小論では多様な綴り字のバリエーションにさらされた中英語後期の写字生が、そのバリエーションをどのように扱ったかに焦点を当て、特定の綴り字が浸透し拡大していく過程を明らかにすることを試みる。

3. Pepys 2125写本の第1テキストに見る綴り字のバリエーション

3-1. Pepys 2125写本の第1テキスト

Pepys 2125写本には多数の中英語テキストが含まれており、このうちの以下に示す冒頭の2点は同一写字生によって転写されたものとされる (cf. Taguchi & Iyeiri 2019, p. xiv)。

The Chastising of God's Children (1r-28r)

Pepysian Meditations on the Passion of Christ (28v-38v)

写字生の言語はWest Midland、特にグロスターシャー付近の特徴を示し、転写はおおむね15世紀前半と考えられる (Hanna 2010, p. 12; Taguchi & Iyeiri 2019, pp. xlv-lvii)。当然ながら両テキストの言語には共通点が多いが、同一写字生によるものであっても異なる特徴もある。第1テキスト (以下、*Chastising*) の方が転写の際に参照したテキスト (exemplar) の言語を変更しながら写す自由度が高かったようで、結果的に、綴り字を含む写字生の言語の特徴を読み取りやすい (Iyeiri 2023)。以下の議論では、この*Chastising*に見る綴り字のバリエーションに焦点を当てる。

3-2. Pepys 2125写本の第1テキストにおける綴り字のバリエーションの事例 (1)、(2)

Chastising における WILL の綴り字の分析に先立ち、同じく *Chastising* の綴り字の分析を行った先行研究として、Iyeiri (2013) と Iyeiri (2023) に触れておきたい。論文の構成上、Iyeiri (2023) を事例 (1) として先に紹介する。Iyeiri (2023) では WOMAN の綴り字の揺れが中英語後期に収束していく過程を扱う。*Chastising* においてもテキスト内で綴り字の揺れが観察できるが、Iyeiri (2023) では、<womman> のような *mm* 型の綴り字が同テキストの最初の部分に集中していることを指摘した。テキストの最初の2葉に生起する WOMAN は、いずれも *mm* 型、あるいは *mm* を略したものと考えられる *~m* を有する綴り字となっている。これ以降は一貫して <woman> のような *m* が単一の綴り字となり、テキスト全体では圧倒的に *m* が単一の綴り字の方が多い。おそらく写字生感覚としては *m* が単一のものが自然な綴り字であり、冒頭部分のみに生じる *mm* 型は、転写の際に *exemplar* の影響を受けたために生じた例外的な綴り字であったものであろう。テキスト冒頭の *mm* がテキスト内で急に姿を消すのは、写字生が古い綴り字を不自然だと感じ、その使用を意図的にやめることにしたのだと推論できそうである。Iyeiri (2023) は、テキスト内におけるこの綴り字の推移を *abrupt shift* (p. 482 *et passim*) とする。

次に事例 (2) として、Iyeiri (2013) に言及する。この論文では、やはり *Chastising* を調査対象として、人称代名詞 *IT* が古英語以来の *h* を保持した *hit* 型 (e.g. <hit>, <hyt>) となるか、*h* を脱落させた *it* 型 (e.g. <it>, <yt>) となるかを分析した。テキスト全体ではどちらのタイプも一定の頻度で生起するが、その分布には大きな偏りがあることがわかった。テキストの冒頭部分では、*h* を保持した *hit* 型のみが現れ、徐々に *h* が脱落した *it* 型が現れ、その頻度が増加していく。テキストの後半になると *it* 型が *hit* 型を完全に凌駕して主流となる。上で見た WOMAN の場合と同様で、最初は *exemplar* の綴り字をそのまま踏襲したものの、次第に写字生自身の綴り字が導入され、その頻度が高まったものと考えられる。しかしながら WOMAN の場合と違い、テキスト内での推移は穏やかである。したがって、写字生感覚では *it* 型の綴り字の方が普通ではあったものの、*hit* 型も許容できる異形であった可能性が高い。テキストの後半で使用

される *hit* 型は文頭で特徴的に現れる、強調のために大きな文字で書かれる場合に起こるなど、特別の場面で観察されやすい傾向もある。したがって *hit* 型は、このテキストを写した写字生にとってフォーマルな意味合いを持っていたか、あるいは強調のための道具立てであった可能性もある。写字生の感覚としては、おそらく WOMAN の *mm* ほど不自然な綴り字ではなかったのではないだろうか^[5]。

3-3. Pepys 2125 写本の第1テキストにおける綴り字のバリエーションの事例 (3)

以上を踏まえて小論では、*Chastising* における動詞 WILL の綴り字を新たに調査したい。中英語では本動詞と助動詞の境界がまだ必ずしも明確でなく、WILL は以下の例が示すように、不定詞形や過去分詞形で現れることもある。

(1) for god hath 3oue a man a free wil bothe for to *wille* to doo and to parforme
that wil in dede. (13r)

(2) wher this cursid spirit myht haue be 3if he had *wold* (23v)

ここでの分析では WILL の機能には言及しないものの、実際には綴り字の揺れが顕著な現在形に焦点を当てるので、(1) (2) のような不定詞形、過去分詞形は調査の対象から外れる。ただし現在形については、本動詞的な振る舞いをする WILL も考察の対象とする^[6]。参考までに過去形では、屈折語尾の揺れはあるものの、語幹母音の綴り字は *Chastising* においては一貫して *o* が使用される。(3) (4) はその具体例である。

(3) and som haue be that *wold* nat aske for3euenys. ne do no penau~ce (15v)

(4) whiche god *wolde* haue kept (19r)

これに対して現在形では、語幹母音の綴り字に、この時代に特有の揺れが生じる。*Chastising* では、以下 (5) (6) (7) が示すように、*wil-*, *wol-*, *wul-* の3タイプの綴り字が観察できる。

- (5) y *wil* by gynne with the same wordes (1r)
 (6) y *wol* shewe 3ow first by a ensample (3r)
 (7) I seyde in the seuethe chapitle that som men *wul* nat worche with grace
 (19v)

このうち最も頻度が高いのは*wil*-型、次に頻度が高いのは*wol*-型であり、*wul*-型は2例のみである。図1は、*Chastising*におけるそれぞれの系列の綴り字の分布を絶対頻度（縦軸）で示したものである。なお、横軸は写本のページを示す（たとえば、1r-vは、1葉目（1枚目）の表ページと裏ページ。当該テキストは28葉目の表ページで終わる）。

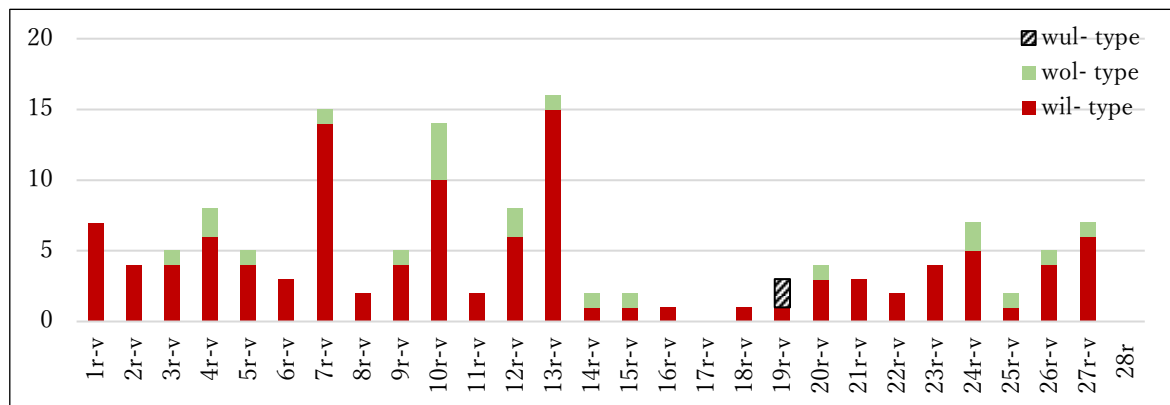


図1 *Chastising* (Pepys 2125) におけるWILLの現在形の綴り字

このグラフから、比較的頻度が高い*wil*-型と*wol*-型は、概ねテキスト全体に分布しているのに対して、2例のみの*wul*-型はテキストの1か所に集中していることがわかる。LALME (I, p. 346) における*wul*-タイプの方言分布はどちらかと言えば西側に偏っているものの、絶対数がかなり少ないため方言地図上ではまばらであり、その解釈は必ずしも容易ではない。*Chastising*における*wul*-型は、おそらく*exemplar*の影響で生じたもので、写字生の通常の綴り字のバリエーションには含まれていなかったのではないだろうか。これに対して*wil*-型と*wol*-型は、どちらも写字生が普通に使用する異形であった可能性が高い。全体としては*wil*-型の綴り字が圧倒的に高頻度であり、*wil*-型のみのページも多いが、*wol*-型の分布も比較的自然而、違和感なく許容されていた様子が見える。

える。LALMEの方言地図においても*wil*-型、*wol*-型ともに中英語後期において広く使用されていることがわかる。ただしLALMEでは、*wil*-型はやや北部と東部に分布の重心があり、*wol*-型は北部を除く地域全般（すなわちEast Midland、West Midland以南）で広く使用されていたようである（I, pp. 345-346）。

ちなみに大法官庁の綴り字をFisher（1984）のグロッサリー（Signet letters、Privy Sealの綴り字も含む）で見ると、*wil*-型、*wol*-型ともに頻繁に使用されていたことがわかる。*wul*-型もグロッサリーに記録されているが、現在形に限れば1例のみとなっていることから、例外的な綴り字であったものと考えられる（p. 400）^[7]。この後の発達で英語に定着したのは*wil*-型であるが、当時の英語では*wol*-型も広く使用されていたようである。なお、*wol*-型の綴り字が現代英語の否定縮約形*won't*のもとになっていることは言うまでもない。

3-4. Pepys 2125写本の第1テキストにおける3つのパターン

以上の事例研究より、綴り字の揺れの傾向が、同一テキスト内でも語彙によって大きく異なることがわかった。小論で新たに取り上げた WILL の綴り字のバリエーションは、Iyeiri（2013）、Iyeiri（2023）で取り上げた WOMAN や IT のテキスト内での変動に比べると、全体として変化が単調で、分析結果としては地味な印象を与える。しかしながら事例（1）（2）（3）のパターンを並べてみると、綴り字の揺れの収束の過程がわかりやすい。おそらく最も一般的なパターンは、WILL の *wil*-型と *wol*-型の分布のような比較的安定的な揺れであろう。このような *stable variation* の状態は言語の至る所に存在しており、これが *dynamic variation* に変化したところから、揺れの収束が一気に進んでいくものと推測できる^[8]。人称代名詞<hit>と<it>のバリエーションは、*Chastising* の言語ではすでに *dynamic variation* に至っている。まさにこのテキスト内の言語において、<hit>から<it>への置き換えが進行する様子を観察することができる。一方、同テキストの WOMAN では *dynamic variation* の最終段階の特徴を見ることができる。WOMAN の *m* が単一になっているものがテキスト全体で採用されていてきわめて安定しているが、テキストの冒頭部分のみに起こる *mm* の綴り字は、*dynamic variation* の最終段階を示す変化の名残であると言えそうである。WILL においても、*wul*-型の綴り字について同様の推論が可能であり、変化の最

終段階では、きわめて少数派の綴りが、特殊な分布を示しながら取り残されたように現れることがあると考えることができる。ただし少数派の綴り字は、変化の最初期の段階でも起こる可能性があるので、その解釈には綴り字の変化を通時的な視点から広い視野で眺めることが求められるだろう。

4. 結語

以上、Pepys 2125の第1テキスト、*Chastising*の分析を通して、中英語の終盤に綴り字の揺れが収束していく過程を見てきた。より具体的には、綴り字の異形とその分布に着目することで、収束の段階を読み取る手がかりとすることができる点を、WOMAN、IT、WILLの三つの事例を通して明らかにした。これまでの綴り字研究では、どの地域でどの綴り字が観察できるかに関心が向けられる傾向があった。しかしながら、綴り字の揺れの収束をより動的な視点から観察するためには、それぞれの綴り字が生起する頻度、特に相対的頻度の変化にも注目する必要がある。さらに、異なる綴り字がテキスト内でどのように分布しているかを分析することで、綴り字に対する写字生の意識を読み取ることも、綴り字の変化の過程を明らかにする重要な手がかりになろう。統語研究等で広く利用されているバリエーション研究の方法を、この分野にもこれまで以上に有効に利用することで綴り字の変化の過程をより詳細に記述することができる点を強調したい。

(いえいり・ようこ 京都大学 教授・学術博士)

●注●

- [1] もちろん皆無ではない。小論と同様に中英語期の終盤を扱った研究としては、たとえば Conde-Silvestre & Hernández-Campoy (2004)、Conde-Silvestre (2019) を挙げることができる。いわゆる Chancery の綴り字がどのように言語使用者の間に定着していったかを扱った研究である。また近年は、語源的綴り字の研究において、その拡散の過程に注目する研究が多数報告されている。たとえば、Iyeiri & Uchida (2021)、Hotta & Iyeiri (2022)、Uchida & Iyeiri (2023) など。
- [2] AB Language は、J. R. R. Tolkien の用語。Cambridge, Corpus Christi College 402 写本の *Ancrene Wisse* (A) と Bodley 34 写本の Katherine Group と呼ばれる一連の宗教テキスト (B) に共通の言語的特徴が見られることから、合わせて AB Language とされる。AB Language は小さな

標準化の動きであるとする事はできるものの、この事例は特定の写本に限定され、標準化としては規模が小さすぎると考えられることが多い (cf. Horobin 2013, pp. 98-99)。

- [3] 言語の標準化については、Haugen (1966) が提唱する “selection”, “acceptance”, “elaboration”, “codification” (p. 933) の4段階のモデルがよく知られている。ここでの議論もこのモデルを意識したが、小論が扱う綴り字の標準化では、とりわけ選択と受容 (浸透) に焦点を当てることになる。ただし綴り字の歴史には、語源への意識や辞書の編纂なども関係するので、全体としてはHaugenのモデル全体への考察も必要となることは言うまでもない。
- [4] 綴り字における地域的な特徴が中英語後期に徐々に失われていく状況に対して、Samuels (1981, p. 43) は “‘colourless’ regional language” という用語を使用した。この用語は中英語後期の方言を議論する際に広く利用される。また類似の現象について、Taguchi & Iyeiri (2019, p. xlvii) では、“late Middle English popular forms” という用語を使用する。
- [5] 本稿ではPapys 2125写本のみを扱うが、Iyeiri (2018) では1494年に印刷された *Speculum Vite Cristi* を用いてテキスト内での <hit> と <it> の分布を調査した。このテキストでは <hit> から <it> への移行がさらに進んでおり、15世紀がこの綴り字の変化において重要な時代であったことがわかる。
- [6] 当然ながら名詞の WILL は調査の対象外とする。
- [7] Fisher (1984) の *Anthology* についてはさまざまな議論があるが、本論文の主旨とは異なるので、ここではChanceryの綴り字の詳細には立ち入らない。Benskin (2004) 等を参照。
- [8] 言語変化に variation がかかわっていることは広く知られている。ただしすべての variation がすぐさま言語変化につながるわけではなく、variation の中には比較的安定した stable variation と言語変化に直結する dynamic variation があることに言及する研究も少なくない (e.g. Labov 2001, p. 85; Traugott & Trousdale 2013, p. 132; Auer & Voeste 2012, p. 262)。

■ 参考文献 ■

- Auer, A. & Voeste, A. (2012) Grammatical variables. Hernández-Campoy, J. M. & Conde-Silvestre, J. C. (eds.) *The Handbook of Historical Sociolinguistics*. Wiley-Blackwell. pp. 253-270.
- Benskin, M. (2004) Chancery standard. Kay, C., Hough, C. & Wotherspoon, I. (eds.) *New Perspectives on English Historical Linguistics: Selected Papers from 12 ICEHL, Glasgow, 21-26 August 2002, Volume II: Lexis and Transmission*. John Benjamins. pp. 1-40.
- Conde-Silvestre, J. C. (2019) Spelling focusing and proto-standardisation in a fifteenth-century English community of practice. *Studia Neophilologica* 91(1), pp. 11-30.
- Conde-Silvestre, J. C. & Hernández-Campoy, J. M. (2004) A sociolinguistic approach to the diffusion of Chancery written practices in late fifteenth century private correspondence. *Neophilologische Mitteilungen* 105, pp. 133-152.
- Fisher, J. H., Richardson, M. & Fisher, J. L. (eds.) (1984) *An Anthology of Chancery English*. The University of Tennessee Press.
- Fisher, J. H. (1977) Chancery and the emergence of standard written English in the fifteenth century. *Speculum* 52, pp. 870-899.
- Hanna, R. (2010) *The English Manuscripts of Richard Rolle: A Descriptive Catalogue*. University of Exeter Press.

- Haugen, E. (1966) Dialect, language, nation. *American Anthropologist* 68, pp. 922-935.
- Horobin, S. C. P. (2001) The language of the fifteenth-century printed editions of *The Canterbury Tales*. *Anglia* 119, pp. 249-258.
- Horobin, S. (2013) *Doe Spelling Matter?* Oxford University Press.
- Horobin, S. (2015) Dialects and standards in Late Middle English. *Studies in Medieval English Language and Literature* 30, pp. 17-28.
- Hotta, R. & Iyeiri, Y. (2022) The taking off and catching on of etymological spellings in Early Modern English: Evidence from the EEBO Corpus. Los, B., Cummins, C., Gotthard, L., Honkapohja, A. & Molineaux, B. (eds.) *English Historical Linguistics: Historical English in Contact: Papers from the XXth ICEHL*. John Benjamins. pp. 143-163.
- Iyeiri, Y. (2013) The pronoun *it* and the dating of Middle English texts. Hosaka, M., Ogura, M., Suzuki, H. & Tani, A. (eds.) *Phases of the History of English: Selection of Papers Read at SHELL 2012*. Peter Lang. pp. 339-350.
- Iyeiri, Y. (2018) Interpreting different types of linguistic variation: *hit* and *it* in Middle English. Ohno, H., Mizuno, K. & Imahayashi, O. (eds.) *The Pleasure of English Language and Literature: A Festschrift for Akiyuki Jimura*. Keisuisha. pp. 95-107.
- Iyeiri, Y. (2023) Intra-text variation as a case of intra-writer variation: Middle English scribal behaviours, with a focus on the spelling variation of WOMAN in MS Pepys 2125. Schiegg, M. & Huber, J. (eds.) *Intra-Writer Variation in Historical Sociolinguistics*. Peter Lang, pp. 473-490.
- Iyeiri, Y. & Uchida, M. (2021) Etymological spellings in William Caxton's translations. *English Studies* 102(8), pp. 991-1001.
- Labov, W. (2001) *Principles of Linguistic Change, vol. 2: Social Factors*. Blackwell
- Laing, M. (1994) The linguistic analysis of medieval vernacular texts: Two projects at Edinburgh. Kytö, M., Rissanen, M. & Wright, S. (eds.) *Corpora across the Centuries: Proceedings of the First International Colloquium on English Diachronic Corpora, St Catharine's College Cambridge, 25-27 March 1993*. Rodopi. pp. 121-141.
- McIntosh, A., Samuels, M. L. & Benskin, M. (1986) *A Linguistic Atlas of Late Mediaeval English*. 4 vols. Aberdeen University Press.
- Nevalainen, T. (2012), Variable focusing in English spelling between 1400 and 1600. Baddeley, S. & Voeste, A. (eds.) *Orthographies in Early Modern Europe*. De Gruyter. pp. 127-165.
- Samuels, M. L. (1963) Some applications of Middle English dialectology. *English Studies* 44, pp. 81-94.
- Samuels, M. L. (1981) Spelling and dialect in the late and post-Middle English periods. Benskin, M. & Samuels, M. L. (eds.) *So Meny Longages and Tonges: Philological Essays in Scots and Mediaeval English Presented to Angus McIntosh*. Edinburgh (Benskin, M. & Samuels, M. L.). pp. 43-54.
- Smith, J. J. (2006) From Middle to Early Modern English. Mugglestone, L. (ed.) *The Oxford History of English*. Oxford University Press. pp. 120-146.
- Taguchi, M. & Iyeiri, Y. (eds.) (2019) *Pepysian Meditations on the Passion of Christ*. Winter.

Traugott, E. C. & Trousdale, G. G. (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*. Oxford University Press.

Uchida, M. & Iyeiri, Y. (2023) Etymological and non-etymological spellings of FALCON and SOLDAN (SULTAN) in Caxton's *Paris and Vienne* and some related French versions. *Kwansei Gakuin University School of Sociology Journal* 140, pp. 69-83.